

1. 人相見の絵



① 源氏物語淡彩白描画 (国文学研究資料館蔵 ヌ 3-145-1)

桐壺巻の高麗人の観相見の場面。当時来朝していた高麗人に光源氏の相を身分を伏せたまま観させた所、帝王となるべき相はあるが、そうすると国が乱れる、国の重鎮となる者として観ると、その相も違ってくるとの言により、桐壺帝は、光源氏を皇族から外して源氏に下すことを決意する。



「高麗人(実は渤海人)が光源氏を
観相する場面」

② 婦人相学十躰 浮気之相 / 喜多川歌麿 (個人蔵)

③ 婦女人相十品 / 喜多川歌麿 (個人蔵)

④ 人相見の図 / 作者不明(個人蔵)

「婦人相学十躰」は喜多川歌麿(1753?-1806)の代表作ともいえる揃物。美人大首絵の中に気質の類型まで描き分けようとした。湯帰りの女が振り返った一瞬を描き、多情で浮かれがちな女の性格を写し出している。「婦人相学十躰」に「浮気之相」という観相の標題を付した所、相者関係者達からクレームがあったために、次のシリーズの「婦女人相十品」では観相の結果を削除せざるをえなかったと考えられている。(『浮世絵大事典』「婦人相学十躰」の項、東京堂、2008)

人相見の図(④)は、女人相見が江戸期にもいたことがこの図からもわかる。女性と占術との関係はシャーマンとしては卑弥呼の鬼道、秦代末から前漢にかけて活躍した著名な観相士、許負など、古くから関係が深い。